



Subaru

男声合唱団 ニュース№624 17. 9. 2

「昴」第7回団内コンサート開催さる！

8月27日

□ 8月27日（日）13：00～15：30、「昴第7回団内コンサート」が新大阪ココプラザ美術工房（大阪市立青少年センター）で開催されました。今年は26日（土）に「第17回総会」が開催され、懇親会のあと宿泊、そして28日（日）午前の定例レッスンのあと、引き続き「第7回団内コンサート」が開催されるハードなスケジュールでしたが、昴のメンバーは元気いっぱいそれぞれの会合に参加しました。

「団内コンサート」はソロ独唱でエントリーした18名、デュエット1組2名、尺八独奏1名、そして3つのパート別演奏、最後に西應静さん、森二三さんのピアノ独奏があり、団員の参加者は全37名＋特別参加2名（千秋教室生徒）でした。また猛暑の中を、テナーのパートレッスンや「中村教室」で声楽指導いただいている中村聖保先生、またお客様の角高めいさんのご主人にも熱心に聴いていただきました。



□ 開会の挨拶を指揮者の本並先生にお願いしました。「一つの合唱団が主催して団のメンバー・シニアの人たちの声楽発表会をするのは全国でも珍しいのでは・・・この会が11回コンサートの成功に結びつけば、これほどいいことはない」と。

□ トップバッターに仲谷増広・中谷清一さんがデュエットで「前線にも春が来た（鶯）」を、力強く低音部の兵士の男の声をバスで、そしてよき春よ来たれとうたう鶯の高音の声を美しいテノールの声で見事歌い上げていきました。



□ 続いて日本歌曲の名曲の数々が、昴のベテラン歌手のみなさんによって歌われました。

大橋一雄さんは、「水色のワルツ」を「日頃の発声練習の成果がどう出るか？」と・・・のびやかな声量でゆったりと雰囲気のある歌が会場に響きました。

山本直一さんは、NHK テレビ小説「マッサン」の主題歌でもある「麦の唄」を主人公の「故郷スコットランドから日本の大地で一本の海となって生きる心意気を歌う」と舞台衣装も粋な主人公になりきって熱唱されました。

若園達雄さんは「惜別のうた」を高音の清冽な声で、切々とした作者の思いを聴く人のところに届かせていただきました。

立川孝信さんは「城ヶ島の雨」：男声の歌曲の中で誰もが一度は歌いたい名曲でなかなかの難曲です。美しいテナーの声がこの曲とよくマッチして、「城ヶ島」の情景が会場に届き、聴衆はこの曲が日本の名曲であることを再認識することになりました。



三谷卓さんが「青葉城恋唄」：昂の大先輩！若々しい三谷さん。情感豊かなうたごえで、高音(テナー)の明るい声の「三谷節」が聴く人々を魅了しました。

□引き続き、千秋教室のレッスン生が日頃のレッスンの成果を披露しました。吉川勝彦さんがドイツ歌曲の代表作・シューベルトの「冬の旅」より「Gute Nacht」を、山下巧さんがグ्रीクの「ソルベイグの歌」を、寺脇伸育さんがバーンスタイン作曲「ウエストサイド物語」より「マリア」を、川妻成美さんがロシア民謡「栄えある湖 聖なるバイカル」を、土井一正さんがヘンデル作曲「ラルゴ (Largo)」を、そして角高めいさんが「もののけ姫」をと、それぞれの歌い手の個性豊かな特徴ある声で、各自の完成度で歌い上げました。



□ 休憩をはさんで、第2部が高田和弘さんの尺八独奏「四季の日本古謡」で始まりました。琴3面のCD伴奏と見事マッチングした尺八の音色。落ち着いた華やかな雰囲気会場を満たしました。

□ 引き続き、「昂」の「ベテラン・ソリスト」と「新進気鋭」の歌い手の熱演が続きました。三村千晴さんが、ロシア歌曲「淋しい手風琴」を披露されました。ロマンスに満ちたロシア歌曲のふんいきに会場は酔いしれました。

続いて乾正明さんが「秋の野」を。北原白秋の詩に団伊玖磨が作曲した「六つのこどものうた」から「夕暮れ時の遊ぶ子供の情景に自分を重ね合わせて」と。

奥村克美さんは高田三郎の世界「雨は降る」に挑戦されました。そして古谷敏郎さんは「波浮の港」を、亡き母に教えてもらった名曲「母に教えてもらったように素直に歌いたい」とバスの声量ある声で朗々と歌われました。

大島成美さんはドナウディ作曲「私の愛する人」を、山本宏司さんがトスティ作曲「理想」を、そしてトリに千秋晶弘さんがロシア民謡「黒い瞳」を熱唱されました。

□ソロの演奏のあと、各パートのパート演奏が続きました。トップテナー「原爆を許すまじ」(詞：浅田石二・作曲：木下航二)、セカンドテナー「遥かな友に」(詞・曲 磯部俣)、バリトン・バス合同「桑畑」(詞：門倉さとし・曲：関忠亮 編曲：森二三)が演奏されました。



今年も昨年に引き続き「パートレッスンの定例化と充実」（「パートレッスンの定着と強化、パートの演奏能力の向上」）が昂の課題の一つになっていますが、新しいメンバーが加わってパートレッスンが充実し、短い練習時間の中でも、各パートともそれぞれのパートの特徴を生かし、よくまとまった演奏の力量を発揮した発表となりました。

□プログラムの最後に、2人の専属ピアニスト、西應静先生が、印象派の作曲家ドビッシーの前奏曲集（第1集）より「アナカプリの丘」を、森二三先生が、ベートーベンの「ピアノソナタ第14番第3楽章・月光」を演奏していただきました。リハーサルを含めて、出場メンバー全員の伴奏にお付き合いいただいた上に、見事な演奏に聴衆は大きな拍手で応えていました。



□「お客様の感想」を中村教室の中村聖保先生よりいただきました。



「個性を出した素晴らしいソロでの演奏、素敵な2人のピアニスト、そして本並先生のご指導、昂は力を結集して何でもできる合唱団で感心しています。声楽レッスンやソロで歌うことは合唱とはまた違うが、自分にしかない声で、個性的な声としての楽器をもっと磨いてほしい。ピアノが最後まで弾いている、歌い手は余韻を聴いて楽しむこと。歌い終わっても途中で終わらない。パート演奏はよく頑張って男声の素晴らしい声を楽しませてもらいました。みなさんありがとう」

□最後に千秋団長から、閉会の挨拶をいただきました。

「きょうは一人一人の個性的な輝いた声を聴かせてもらいました。昂は素晴らしい歌い手をたくさん持っている。昂の自慢するところです。合唱とは違ってソロで歌う場合は、指揮者がいない、一つの

曲を伴奏者と一緒に作曲家の意図するところを創り上げていく。それがソロの魅力です。一人一人が違った楽器。新しい曲・新しい峰への挑戦・新しい分野へ挑戦して自分の歌の世界を広げてほしい。それが聴く人に伝わる。歌が上手になるには人前で歌うこと。こういう機会を利用してぜひ挑戦してください。これまで団内コンサートで歌っていない人、来年も必ず8回目しますから、今から心の準備を。歌っていただく・楽しんでいただくことによって、声量も声の質もよくなる。昂の合唱もレベルが上がる。今日は素晴らしいうたごえありがとうございました。」